



椿説弓張月

後篇

四

13
2945
10



門 2945
卷 10

吉野

大田

鎮西八郎
烏朝外傳

椿説弓張月後篇卷之四

東都

曲亭主人編次



第九三回

海岸孤客を慕ふ
水晶花
池水三尊を現ぞ並頭蓮

當下為朝と為頼。龍江鬼夜又ホグ自殺のりかあつて。大は後悔し直嶋君
を刺殺して。後中々腹を切らんとおぼせしうば。さほげうも稚れ人かどう
川は。腰に刀を振りりらて。吐嗟とええと折しもあれ。忽地澳のかさより。
ひとりの漁夫。船を暮直に積著て。為朝の船に乗移り。嶋君を抱えりり
りりりも住れを。為朝と。なほ辨ひ退く刺んとし。ちめてその人かえり
これ別人ふゆ。之郎の長女が。後身女の夫とれ。四男五郎ありし。この
か。どぞ。どりのに。左右さへ。通り。あつて。ぬい。海。し。に。が。に。あ。れ。か。あ。り。早

昭和九年七月九日
録

くも身ほれと向多ハ四男五郎答く僕とえてとれをきつべとの朝潮舟嶋敷
成治らんして彼誰時より私をおし彼処の岩陰にさうひつれか推とを
年の齡と十むかりされ女子と十むかりなる男の童の声て。まが名成さぐ
ゆひひ。八郎の曹司目今耳嶋に私をよしひつ故わつ。季の小女見鳥
君次刺殺し。その身も自害せんともふこと。いと急なり。さく行くさむちも
とこそじつられ。その声ハ耳の辺ふりて。その人を影もは。そのみ作りと
怪しむと。の曹司とてさくさくさくしけれ。あじもゆふに私さくらし
くらに身さくさくさくつれと。果してなれとさくさくさくさく。何の故
に桃しく。この嶋が根も身多ひく。愛子を殺し。又さくさく死んとも
多ひと縁故をさくさくさくさく。いと急なり。さくさくさく。為朝すく嘆息し
呀。汝をゆびとれものさく頼。蘇江が幽魂かれは。彼ホ黄泉おれとさく

るほとれをさくさくさくさく。と宣ひく。長悼氣さくさくさくさく。
かうさくさくさくさく。さくさくさくさく。さくさくさくさく。如此
ぬ此より。後と箇様くさくさく。忠重國府へ脱去り。茂光官軍と將て
押とせさくさくさく。鬼夜又と蘇江は。忠義の為に命預し。為頼と
死を潔して。死に野嶋の館に曝せり。審み鏡さくさく。二通の遺書と読
はしたるに。四男五郎とさく。毎に且感。且悼。挾れ袂に漏る雨を
る月潮垂る。腰袋の膝に抱る。嶋君も潜然と泣く。父のさくさくさく
環のいさくさくさく。さくさく。さくさく。又四男五郎に宣ふさく。
何れともむひさくさく。稚子に殺さん。鬼にともひ。さくさく。鬼夜又
賺さる。大嶋を脱。去子先を家隸を先。朝敵と呼ぶ。さくさく
とよさく。活人して。織た舉動をさくさく。既ホ是期究る。れを汝ふりの

愁に長女亦不抑留せられてハ。志気遂がじ。さてもかくても死おくれ
玉の緒風小舟して。濱岐國に押渡り。新院の陵にありて。臣が孤忠が
ちりか。これと街廟を首出。腹を切らん。のれとひらり。つと。才と記
ち。忙しく。紅小乗。人とし。多入。嶋君。とこれ。を。父上。何處へ。行。お。は。ひ
た。人。と。泣。感。心。袖。も。露。け。れ。直。垂。に。ほ。つ。り。多。入。の。武。士。の。猛。と。う。も。よ。り
は。や。を。く。強。寄。と。抱。れ。わ。げ。け。れ。小。舟。の。子。ど。り。ら。お。連。て
ゆ。く。さ。へ。恨。む。ご。れ。お。これ。を。し。も。出。お。う。は。い。か。舟。を。後。中。と。も。彼。ホ。ら。う。便
ま。う。らん。中。上。嶋。君。父。が。死。ん。と。ら。流。り。て。ハ。何。舟。を。も。何。い。じ。と。も。あ。ら。じ。と。と。れ
その。も。ど。り。あ。つ。と。あ。れ。長。女。ホ。が。恨。も。ら。ん。數。人。か。も。せ。り。て。像。見。を。送。入。と。と。と。
馴。じ。弓。に。矢。ど。り。副。と。品。の。扱。間。小。侍。か。け。お。を。懸。く。嶋。君。舟。冬。に。扶。摩。て
お。つ。の。磯。を。漕。く。る。れ。渺。々。な。れ。昔。海。原。風。の。隨。意。生。と。と。と。潮。も。引。や。ら

る。海神の隣にらん。矢次發とて。走り帆の逐不迹。うらり。け。有。在。程。お
長女とゆ。りの稚子と。も。に。小。船。小。乗。り。て。四。男。五。郎。に。楫。取。り。し。其。の。妻。は
持。て。耳。鳴。に。身。づ。皆。り。終。も。に。磯。方。に。登。り。け。曹。司。と。何。處。ぞ。と。て。彼。此。と。お
境。ど。も。その。人。と。お。も。せ。と。と。え。れ。の。巖。が。根。よ。一。張。の。弓。と。二。條。の。征。矢。の。り。り
と。不。審。と。お。り。あ。か。ら。ぬ。び。汀。渚。に。走。り。出。と。え。か。ら。え。れ。ど。が。外。お。駈。り。つ。ひ
ま。そ。な。う。り。け。れ。長。女。と。この。景。迹。に。愀。然。と。う。ら。數。人。と。て。ハ。曹。司。と。この。嶋。お
も。住。り。多。う。と。と。ほ。ほ。も。と。や。何。地。へ。う。脱。去。多。う。ひ。らん。その。夢。も。て。と。あ。ら
さ。れ。や。愛。な。ら。ば。是。に。て。君。が。面。影。を。よ。と。と。砂。の。上。に。轉。轉。と。四。男。五。郎。夫
婦。も。お。難。く。共。お。望。が。喪。つ。り。且。て。四。男。五。郎。と。件。の。弓。矢。取。取。て。長。女。が。お
ア。ん。じ。置。け。又。慰。め。て。り。り。け。れ。ハ。曹。司。蓋。世。の。義。士。に。て。と。か。か。ら。も。敵。の。鋒
先。を。避。く。に。漂。泊。し。多。入。と。は。何。舟。に。入。達。入。ん。と。と。何。面。ま。く。お。し。像。見。の。弓。矢



離別を慰て
異人後榮と哉

春説子長月後篇卷之四

春説子長月後篇卷之四

恨遺し多ふこそ。かたきもさぐらばいふまじして本鳴へ誘引をねがひしに。いかに
 悔ともその詮はし。うとの末に父さぶらふ洲人も當りなかりし。これこそ恨の心。
 況んや身長の長傷にむひとりとのう人もあつた。終つて又上の面おも認めなきはれ。
 太師丸二郎丸の今こそわれ成長する朽きくぞおぼそた。いかにむねをさの
 能あり。あつたのれ今生の縁一竭てへ人力の及ぶたぬのみ。只この弓矢を彼君の
 と入りしんせめて稚子ならん武勇を伊人多くし。世の頼もこのとみにて大鳥
 みて自害も多しひわれ。藤江の君さうに身がまてくれと終の中。いかにありけりや
 おりひまの人の親にして。その子にむかひてりや。それしも忠と義れたりに。撫ぐ墓
 なく死なれど痛くもいと惜れを彼女とひくらべて。このまに歎か多しと。言治
 を竭して諫れば。四男五郎が妻。又さるべきにいと。しづ夫婦の終も。に太郎丸
 二郎丸を抱へむ。けりけり長女を誘引て。船に乗るといそ。がしづられど長女と

卯木にむかひて。伏しられ儘もあかき涙の隙小なり。つれを。世の中。生
 じ。流るりの親の最期を。悲しむるや。過る年のこの月。初別。はより浦
 風。の信。た。う。て。三。年。も。夢。と。思。え。恩。義。も。父。を。死。に。ま。す。う。く。う。め。れ。し
 藤江の標。獨ら。と。潔。に。忠。孝。の。名。に。大。嶋。の。磯。に。藻。屑。と。なり。あ。ら。む。為。頼。君。の
 孝行を。あ。ら。む。も。あ。は。れ。数。も。あ。ら。む。が。身。ひ。と。り。の。年。母。の。給。つ。ま。も。せ。を。熱。く。死。す。て
 別。々。悲。さ。の。み。れ。が。か。か。れ。を。察。し。た。り。人。親。も。こ。れ。君。も。捨。れ。ま。さ。ひ。も。う。た。た。ね。り
 松。や。や。十。歳。は。預。け。た。り。も。忘。る。際。の。あ。ら。む。ら。う。と。流。げ。に。た。れ。武。士。の。常。と。し
 り。と。競。の。あ。ら。む。く。ら。い。の。う。ら。か。ら。名。告。も。め。ど。神。馬。藻。の。り。か。けて。外。子。過。り。た
 結ぶぬ。船。の。こ。の。さ。し。は。い。と。ぐ。れ。と。直。に。死。ね。じ。と。い。つ。ら。ば。う。の。う。と。情。像。見。も。今。は
 化。り。と。恨。の。限。り。か。に。説。か。り。ひ。逼。り。て。物。取。い。しく。唯。ま。り。た。れ。破。り。路。な。り
 て。身。と。投。入。し。たり。け。し。ば。四。男。五。郎。夫婦。驚。た。睦。む。りの。稚。子。だ。ら。む。と。捨。て

春丸号長月後新編卷之四

忙しく抱き置。おは理を述べ疎ゆつ。舊の処へ引居れ。太郎丸二郎丸を
 ともちひとたすねむ。母の氣色の異なれば。昔音に似て。携りて。長女は
 目もられ。中のお恩愛のまうりせむ。人かうらむ。死なれ。父の初も。母
 の歎も。もて。あり。胸のひが。鳴。涙の。懐。袂。を。玉の。床。と。お。母
 とも。朝。成。り。成。に。潮。風。の。吹。く。み。と。れ。乳。房。を。と。推。子。の。み。お。余。れ。獨
 とも。も。今。より。引。放。さ。よ。も。生。育。と。ま。ま。い。と。お。り。ひ。や。れ。と。人。痛。む。と。て。丸。右
 の。腋。に。か。き。よ。せ。く。声。が。惜。ど。は。お。れ。泣。け。ぬ。に。あり。な。れ。松。の。梢。に。一。朶。れ
 白。雲。飄。飄。と。た。ま。引。つ。代。り。て。む。と。の。老。翁。と。なり。長。女。が。ほ。ろ。り。に。ま。在。ぬ。と
 と。月。その。形容。頭。長。く。し。身。半。し。童。顔。白。髪。九。あ。ふ。ふ。と。み。一。箇。の。大
 麻。を。捧。り。ら。竟。然。と。笑。く。い。つ。り。と。れ。と。善。女。う。あ。ふ。ふ。と。怪。し。む。と。く。な。れ
 くれ。へ。原。八。郎。為。朝。有。縁。の。り。の。ふ。て。年。暮。大。鳴。に。往。身。影。の。と。く。も。附

そひく。彼。人。を。守。れ。を。り。と。此。度。亦。從。ひ。て。四。國。へ。渡。ら。ん。と。て。く。み。過。り。即
 婦。別。離。の。悲。歎。に。堪。じ。て。命。が。預。え。んと。す。れ。を。う。る。に。忍。び。と。天。機。以。渡
 ら。と。の。お。それ。の。め。れ。と。き。じ。ま。く。つ。て。後。耳。の。吉。事。を。告。が。さ。く。と。も。死。べ。と。ん
 なる。千。辛。万。苦。厭。じ。て。ぬ。り。れ。推。見。を。守。育。よ。今。より。後。十。年。が。行。か
 平。氏。滅。亡。して。源。氏。一。統。の。世。と。なり。て。ん。その。と。れ。國。地。お。敷。た。く。明。白。し。新。な
 と。この。胞。兄。弟。の。子。孫。鳴。く。に。繁。昌。して。さ。か。安。堵。の。お。り。ひ。を。う。と。ま。じ。ま
 れ。の。慈。母。の。績。莫。大。は。して。今。死。と。れ。お。の。遙。お。勝。り。哀。苦。も。遍。り。と。溝。瀆。に
 溢。れ。る。匹。夫。匹。婦。の。う。ふ。と。め。れ。為。朝。の。側。室。の。似。ひ。は。す。も。皇。國。乃。宗
 廟。天。照。皇。太。神。の。万。の。民。を。慈。と。な。ま。す。と。ぬ。く。普。天。の。下。平。子。の。遺。體。に
 多。の。ご。れ。隈。も。な。し。今。より。奉。鳴。お。勸。借。さ。く。普。賢。明。神。と。崇。和。の。行。は。す
 蚤。飼。し。幸。め。れ。の。と。ね。ふ。に。洲。人。一。切。の。災。害。を。禱。め。さ。じ。且。某。の。年。其。

に至りて。もろもろ鳴なれ何じ山の麓の原ふ。三葉並頭の蓮花忽然生
生じて弥陀三尊の影向あまのりかんとれぞとの鳴お神道佛法の警昌
さくえ頼祥なれ。そのとれ二郎九と出家して。父祖の菩提を吊さぶ。然り
こいとも。為朝の命運目今々に竭れおのよ。但今生の對面と。その望を
遂ぐるの。これハ像見の弓と箭ハ一社の神と。祝紀ら。彼人こも在ま
が如く。まが子孫の獲とるん。勢くさひ。悟をか。と説。件の大麻ハ
長女小蓮子。か。鏡ぶ。失あ。り。長女と。示現あ。り。て。猛小夢の足
く。心持。四男五郎も。その妻も。奇異のお。ひを。は。つ。ま。り。あ。り。も。合
掌して。と。じ。其。方。伏。お。み。さ。後。榮。と。の。じ。と。て。中。怒。の。眉。根。ハ。仲。遠
ぬ。も。ろ。も。ろ。鳴。に。ま。り。て。別。人。亦。不。縁。由。ハ。告。あ。り。と。れ。ハ。衆。人。皆。之。為。朝
の。と。れ。留。了。ら。れ。が。本。意。さ。り。の。れ。と。異。人。の。示。現。小。畏。と。て。い。う。太。行。太

書を
てし
を
つ
る

二郎九ハ敬ひ冊れおのく力を戦して。又鳴小生祠ハ御理ひ像見の弓箭
不神體と。ハ。部。明。神。と。崇。紀。又。本。嶋。一。社。を。建。立。一。天。照。皇。太。神。を
勸請と。考。婆。明。神。と。神。号。ハ。この。兩。社。今。も。日。彼。真。に。の。り。と。や。か。て
許多の年ハ行。治。承。三。年。秋。八。月。為。朝。の。姫。さ。り。け。れ。前。兵。衛。佐。頼。朝。鮭。小
嶋。に。義。兵。を。揚。む。ふ。と。と。勝。と。り。あ。こ。と。な。く。文。治。元。年。三。月。下。旬。平。族。悉。く
西海の泡と消て源氏一統の世となり。太。郎。九。二。郎。九。を。鎌。倉。并。赴。北。條
時政ハ就。為。朝。の。庶。子。な。れ。は。し。る。番。お。治。ま。し。う。は。頼。朝。女。ハ。對。面。有
て。太。郎。九。ハ。大。嶋。を。管。領。は。二。郎。九。ハ。も。ろ。も。ろ。鳴。を。領。も。と。れ。は。し。御。教
書。ハ。賜。了。割。為。朝。の。節。義。勇。敢。と。田。横。ガ。風。の。り。と。て。賞。嘆。の。の。り。朝。廷。へ
ゆ。え。の。け。て。為。朝。勅。免。の。り。ハ。執。一。ハ。は。れ。り。か。ん。お。は。け。ま。く。も。後。高。倉。院。の。宮。後
高。倉。院。の。宮。の。御。筆。に。ハ。郎。大。明。神。と。の。を。と。り。神。号。ハ。銅。板。ハ。鑲。著。新。小
云。い。と。不。審。

神影を鑄じし。これ小甲冑相副く賜われし。太郎九二郎九を飲出にして朝
 恩に拜謝し。それを故嶋小守かりて本社に安置し。長女四男五郎亦に幸
 の趣に言えあじし。いづれか。例人々を侍せて大に飲び。すく。信く。嶋
 鎮守と仰れ。神徳日。灼然たり。経に鎌倉世々。將軍信仰
 のさか。いづれの。時。あ。正一位。贈られ。今。正一位。八郎。大明神と稱す。
 小なる。か。け。長女。宿望。遠て。日。太郎九二郎九。より。中
 中。大嶋の。御曹司に。捨られ。世。既。死。り。跡。を
 不思議の。示現。あり。存命。推子。の。か。幾。跡。を
 又。今。世。の中。に。あり。ひ。只。憾。ハ。曹司
 の。姓。方。今。に。す。え。ども。神體。の。嶋に。鎮座。し。ほ。せば。外。求。む。不
 及。び。苦。節。や。す。に。功。る。餘。命。を。み。た。れ。づ。も。お。は。え。ぬ。め。を。
 今。ハ。別。を。て。ま。ん。足。彼。菩提。の。種。して。二。郎。九。を。祝。髪。入。道。父。祖。の。後。世
 を。吊。り。ん。り。勿。論。あり。願。は。兄。志。を。し。り。申。して。言。行。慎。之。洲。人。を
 憐。て。名。を。ま。じ。ひ。そ。又。四。男。五。郎。夫。婦。を。い。う。君。は。ら。の。御。護
 と。なり。て。忠。臣。と。な。れ。美。名。を。子。孫。に。傳。へ。ん。と。い。ひ。只。それ。の。こと。い
 果。に。忙。し。く。走。り。出。れ。主。従。大。驚。と。や。嘯。と。い。ひ。せ。と。忽。地。行。方
 あれ。ど。り。が。結。且。嶋。山。の。麓。に。れ。沼。の中。に。て。その。屍。を。た。り。づ。主。従。い。こ
 く。哀。悼。み。く。山。の。半。腹。に。と。れ。を。葬。了。この。日。二。郎。九。祝。髪。入。道。を。件。の。山
 小。一。字。の。寺。に。建。立。せ。ん。と。て。既。お。その。用。意。せ。り。あ。う。お。い。と。不思議。あり。け
 と。長。女。も。かり。て。初。七。の。日。彼。沼。に。忽。然。と。並。頭。の。蓮。花。を。生。じ。葩。の中。に
 弥陀。三。尊。の。影。向。ほ。り。て。光明。赫。奕。と。お。な。れ。ん。この。奇。瑞。を。見。て。太。郎
 九。兄。主。従。と。い。や。も。さ。なり。洲。人。ホ。あ。く。感。涙。を。拭。ひ。ぬ。を。合。掌。礼



拜して弥陀佛くと稱れ声。洋く乎として耳に満てり。時しもあれ空中
小花より音楽せえと。弥陀観音勢至の三尊。長女を引接とく水上を
くるれ移して山の頂に立ちあつて見え。紫雲ふ畏れ失ふ。これほどに
二郎丸入道と。ぬく仁恩を感佩して。象教の廣大無偏なれを用悟し。
此度建立の道場。弥陀寺と稱山を香爐山と名づ。為朝成りて第
一世と。その子の二世の住持となり。四男五郎成りて。嶋の賞罰を管じし
なまじい。洲人これを押さみ。入道の宮と稱又四男五郎を大夫と
呼び。その仁政を稱讃せられは。されば宮と太夫と主従ふて。さか
い。つらやう嶋を管領せし。六世の孫雲加入道。時嫡男稚宮が菩提
の為。に康正二年丙子の冬十月武藏國神奈川の宗福寺を請待て
住持と。よりて寺号を更めて宗福寺と。さかかや。是とはくもた。

太郎丸ハ伊豆の大嶋。以管領とく大嶋太郎為家。名告り後。不為政と
更む。これ大嶋の祖なり。と。り。か。に。六。保。元。の。役。に。討。死。せ。り。為。朝。恩。
顧。の。郎。黨。箭。先。拂。須。藤。九。郎。透。同。計。悪。七。別。當。を。取。次。同。子。三。郎。打。込。
組。八。大。矢。新。三。郎。越。矢。源。太。松。浦。二。郎。左。中。次。吉。田。兵。衛。尉。以下。九。八。騎。の。子。孫。
この舊恩を忘れず。大嶋ふ集来。為政ふ仕。か。その家さ。く。栄。つ。
子孫夥在。たり。この。後。の。抄。が。り。り。れ。ど。り。の。叙。ふ。る。べ。く。に。記。
せり。為政兄弟の。この。下。再。活。る。

第九四回

渦九夜逢日の浦を鬧と
嶋君潜ふ尾張路ふ赴く

却説八郎為朝。惜か。ね。身。の。存。命。す。又。は。さ。ら。ち。や。あ。も。あ。ら。は。其。
意。熱。ふ。彼。か。み。て。自。害。せ。り。長。女。と。子。も。ら。が。亡。骸。は。團。居。して。い。く。は。は。

そめいんじん。あれば彼あも物をとらせ。つが後の世の障ともうらねば
こても妻孥に後世にのび死ねばして百歩を取。五十歩駐
類ふこそ。とお不せ。経に潜ふ讀岐國お押こり新院の陵ふしり
ともかくもなまあして。行そ志違ひて青海原を風ふりして出松の岸を牛
楯を操り。或は鳴君を懐ふか抱え。千鳥の声よ。く夜う寐さん。或は人
がれ嶋根お散りて。水汲汲と薪を推百折千磨の艱苦行。その年
秋のころ。瀨岐國多度郡逢日の浦。みそ急より元来世を踏ふ。月は
めれば。尤も好く陸おのほ。折しも泊松の碇を。おらして主後十餘人。おど
羽立ハ故郷へ。纜を解とて。酒り振びつ。この浦の景を賞する。あつる。
為朝とそれふ。少く引こられて。松を歇夜も深。白峯へ。とあつる。松准
いに。ねがら。音もせ。ぎ。せ。折しも夕波満。月ハ海より。に昇り

塩飽七嶋直嶋雌雄の嶋は。氷の上。梅花の散る。いと。と。松
と。ころ。ふ。え。え。こ。り。て。好景い。あ。づ。も。あ。ね。ど。世。お。あ。れ。人。の。数。を。う。と。う。
年。来。荒。磯。お。馴。れ。れ。ど。あ。づ。か。あ。づ。だ。か。て。や。や。更。團。々。彼。処。の。松
り。れ。主。後。も。い。く。酔。ひ。な。り。お。お。び。く。て。寂。し。て。声。も。せ。ど。な。り。に。け。ん。
為。朝。へ。あ。づ。に。松。を。そ。の。ほ。り。に。は。し。し。熟。睡。あ。づ。れ。嶋。君。が。あ。び。は。し
て。の。な。う。べ。し。割。籠。お。飯。を。盛。り。通。路。の。用。意。を。な。ん。あ。ま。ひ。り。浩。処。お。四
國。の。浦。へ。孤。能。徇。て。却。掠。を。り。と。そ。れ。味。の。渦。丸。と。い。ふ。癖。者。夥。れ。支。黨
を。お。と。快。松。お。り。棄。了。件。の。泊。松。お。體。は。し。け。お。の。く。刀。を。引。提。て。乱
と。入。り。汝。お。命。惜。く。踏。銀。擔。物。を。残。り。お。出。せ。異。議。よ。お。あ。つ。る。この。水。底
お。投。入。し。て。忽。地。魚。鱉。の。食。と。な。ん。起。よ。り。の。も。と。あ。つ。る。松。中。の。主。後
も。この。声。お。驚。れ。と。え。こ。ろ。海。は。り。と。て。岸。破。と。起。枕。方。を。れ。刀。お。合。ひ。て。松。館

の門ふま塞り入とじと防た戦へも。酒の酔いも醒ど打太刀も志ど
 みる。只劇騒ぐの賊をゆとく勢い猛く群が羊に虎の蒐入る如く
 嘯叫で砍てはゆれば疾を蒙るの五六人ふ及びつ。その刀尖當るごも
 のらに。その中に主人とおぼして。年の齡五十ほら。文官あもる。武士
 こもええ。それ男太刀を抜うじて防た戦い。忽地小賊二人を砍て水中に
 沈まし。遂小渦丸小まらりあめて奮撃突戦劣らと勝らと人難もせと
 挑し闘い。頼らるる。即黨ハ過半疾負る物の用少とと彼人を
 むかりを勇しとしくも。寡を衆に敵がく吐嗟只今勢もべうええり
 くれ。その死為朝ハ既小陸お上りんとて。船をそのほとりにじはして在せ
 ちう。志じこそあり。それ事れ為体をえお忍びど。間七八艘ハ隔され
 船の中へ閃りと飛で乗り移り。船中の人と疾げよくむりひまおのれ助太刀

そと昔ものも。深山樾の三回賊がいと軽らうに打あつて雷を幸ふ。薙
 臥せ拵ひ倒し。縦横無礙お惚らじ。まろ。行ふ。夥の小賊ホのひの首を打
 砕し。或と向脛を打折れ。羊へ海を打おとされ。羊を駭小へとらり。臥て
 脱るりのひなうり。渦丸とこの猛威お碎揚し。心の中に十二分の害
 怕を生し。刀を引く。脱んとされ。彼男を逃じと追ひ携て。為朝。う
 艦ふま。あかりて。前後より引挾。やと声うけて。諸とも。に打んとされ。を
 渦丸阿呀と叫も。あを。潜脱る身。跳し。海へ井と沈じ。浪を潜れて
 や脱と。にん。ほり。ら。あ。の。浮も。揚ら。と。生死も。それ。ど。なり。に。たり。宜。是。よ。か
 我勇士の援。お。あ。か。ど。か。主。後。塵。に。せ。れ。を。う。し。を。九。死。と。出。く。一
 せ。ん。か。り。と。て。主。人。拵。ま。ら。に。稱。嘖。して。鳥。く。み。朝。小。飲。び。せ。え。中。か。く
 上。望。に。諸。を。れ。が。為。朝。の。く。け。お。著。の。つ。と。それ。へ。故。あ。つ。と。世。小。憚。の。り。の



春説子長月夜上船奇之四



かねが人の饗應を受おとすやうこそなれしが、疾風を勦りて入りしこと
 ぞ彼人けおと鳥取も、恙がれた家隼小御と血を拭し茶をなへ又ぶら
 も展檢して、さへに勦れお傷られしものも酒氣を帯りたる
 て。鮮血とを懸りて生れ、瘻とさびの外おぼりしうは主従もさうい
 へ。みおられ勇士の賜なり。かく再生の恩澤を蒙りさういづれ
 謝を述べられたるは、さういづれ主へ入りて主人さういづれ燈燭
 なく、私館お誘ひつ。ほろくくうら瞻く。大お奇と其許のいわれ四月
 下旬大鳴あそ討死しひねとさへえられた。八郎の曹司あのおぼり
 お。為朝も又経りて。じめて燈の光めて主人の面をえとら驚れ、
 伊豆も。お兄義朝の勇なりし熱田大宮司藤季の軛ねりにてのり
 け。とも何のあふ。さういづれとさういづれと、同じく大宮司答へ。

ちりれごとく。尾張も源家代くれ米地を給ふ某いわれ保延のじや熱
 田の祠官に補られられたも、横岐院の恩ほして併古判官の吹峯に
 よれり。さういづれに、一ひ白峯の墓に詣り、君恩を謝し、さういづれ
 まが。社教に違なされし心もさういづれに、影の年がさせが。この秋
 さういづれ、休暇をほり。猛ふさひくら。船路よりさういづれに到りて。このふ墓へ
 詣りしれど、多幸の宿望足りて、翌ハ獲を解人とおりお折しも、不思議
 の賊難ふあていと危りし。死さかひも、伊曹司の助成およ。主従
 恙うたのみさういづれ、逢日の浦の名は負く。かくも奇を對面さういづれ
 その是非おさういづれ。此度召俱し、おのりのみ。みる腹心の家隼おれは
 や明白お名告りさういづれ。絶て洩るること。願くハ審ふ。縁故おさういづれ
 といふ為朝すて。さういづれ恙なれを祝し。さういづれ宣ふ。為朝苟も、保えれ合

戦ふ父に侍れ。君に侍れ。百戦百勝の計策を献れ。御運の
 傾くとらぬ。歎け。用ひられ。君への荒磯にうられ。親胞兄弟を
 とみ討とて。海東に満る。十年に及び。近曾工藤茂光が
 讒奏によつて。忽ち地誅罰を加はれ。咄々ひ犯せ。罪なれ。しを訴んとつこ
 せども。勅勘の悲し。それも稱つ。所詮妻孥を刺殺。後中々自害せ
 たり。とあり。ひ定げ。に側室。彫江家。隸鬼夜又。郎氏の計畧に。被
 かれた。名もども。彼処を退。嫡男を頼。成に。彫江鬼夜又。亦を却。自害
 せ。失。と後に。あり。胸を噬とも。そのひめ。へら。も。死。後
 と。彫江の。嶺。國へ。押渡り。新院の。墓。首。腹を切ら。そのと
 とい。万里の風波を。凌。ら。して。来。り。と。お。か。り。て。嶋。君。を。侍。つ
 る。又。長。女。小。産。一。た。れ。太。町。九。二。郎。九。め。り。な。ど。お。ら。も。ま。く。説。き。し。な。ら。ふ。み。ぞ
 大宮司と。父。の。毎。に。嗟。嘆。して。猛。小。小。船。を。お。り。し。家。隸。を。為。朝。の。と。侍。り
 遣。して。嶋。君。を。迎。ふ。と。し。父。も。も。に。押。さ。て。酒。食。を。と。り。又。為。朝。に
 對。て。し。あ。や。尾。列。熱。田。の。大。宮。司。へ。尾。張。氏。代。相。續。せ。つ。が。父。藤。原。季。兼
 尾。張。負。職。が。女。見。を。娶。り。お。の。れ。季。兼。を。せ。り。か。て。新。院。徳。法。位。お。り。り。く
 け。ら。後。某。に。こ。り。と。祠。室。に。補。せ。れ。り。今日。お。至。れ。され。古。左。典。範。朝。義。と。い。播
 磨。の。好。人。あり。む。の。ら。彼。人。も。平。治。の。兵。乱。に。討。と。為。我。の。子。息。今。の。後。て。世。不
 在。と。い。と。お。り。ひ。け。れ。幸。甚。して。八。郎。む。り。侍。り。多。り。が。家。大。職。冠。の。末。葉。也
 と。い。も。後。末。源。家。小。由。緒。あり。と。し。許。り。多。り。某。の。嶋。君。を。養。ひ。子。と。し。
 又。嶋。孫。大。推。丸。を。進。ん。で。曹。司。の。後。に。成長。の。後。誓。婚。に。し。曹。司
 の。子。孫。尾。陽。小。繁。昌。昌。せん。致。し。自。殺。を。必。し。と。ほ。り。多。り。熱。田。へ。侍。ひ
 せ。れ。と。い。と。父。も。果。て。為。朝。忽。ち。氣。を。喪。り。元。を。喪。り。を。忘。れ。れ。れ。

大宮司と。父。の。毎。に。嗟。嘆。して。猛。小。小。船。を。お。り。し。家。隸。を。為。朝。の。と。侍。り
 遣。して。嶋。君。を。迎。ふ。と。し。父。も。も。に。押。さ。て。酒。食。を。と。り。又。為。朝。に
 對。て。し。あ。や。尾。列。熱。田。の。大。宮。司。へ。尾。張。氏。代。相。續。せ。つ。が。父。藤。原。季。兼
 尾。張。負。職。が。女。見。を。娶。り。お。の。れ。季。兼。を。せ。り。か。て。新。院。徳。法。位。お。り。り。く
 け。ら。後。某。に。こ。り。と。祠。室。に。補。せ。れ。り。今日。お。至。れ。され。古。左。典。範。朝。義。と。い。播
 磨。の。好。人。あり。む。の。ら。彼。人。も。平。治。の。兵。乱。に。討。と。為。我。の。子。息。今。の。後。て。世。不
 在。と。い。と。お。り。ひ。け。れ。幸。甚。して。八。郎。む。り。侍。り。多。り。が。家。大。職。冠。の。末。葉。也
 と。い。も。後。末。源。家。小。由。緒。あり。と。し。許。り。多。り。某。の。嶋。君。を。養。ひ。子。と。し。
 又。嶋。孫。大。推。丸。を。進。ん。で。曹。司。の。後。に。成長。の。後。誓。婚。に。し。曹。司
 の。子。孫。尾。陽。小。繁。昌。昌。せん。致。し。自。殺。を。必。し。と。ほ。り。多。り。熱。田。へ。侍。ひ
 せ。れ。と。い。と。父。も。果。て。為。朝。忽。ち。氣。を。喪。り。元。を。喪。り。を。忘。れ。れ。れ。

勇士の本意なり。これ誰が爲に命を惜く。其許を煩とせん。あつたわれ人の親
 にしての慈おさへほれといふるに。女兒を殺すの已こと。又ほれに。これに
 捐めらるる嶋君を。進くとて。と母もかゝりも養育くまわれし。あつたを爲朝
 成さ人は久と宣ふ。是非不及びて。この如く自殺して。平生の志を成し
 ひひみんと。いひもゆゑ。刀の鞘に。あつたの。大宮司と。あつたの。あつたの
 くれ。あつたの。尾陽へ。伴ひ進。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの
 季範が。女兒なり。犬稚丸の。曹司の子なり。この一。あつたの。あつたの。あつたの
 と盟と。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの
 盃を。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの
 あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの
 判官。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの
 判官。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの

此度も。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの
 着用。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの
 戴。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの
 る。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの
 定。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの
 ぞ。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの
 雲。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの
 竭。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの
 か。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの
 ち。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの
 さ。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。あつたの

春説弓長月爰篇卷之四



鳴鶴
 鳥朝
 大宮司
 別

本言石月人秋卷之四

とて。為朝も忙し。彼衣服をとりて紙小褌と御士の假初は旅と打扮してこれを脊負ひ大宮司主後に別を告かす。浦曲にのり多く船の中なる主後と懽然として目送りつ。為朝も鳴君の阿と泣声みせして。足信せて走りぬ。かして大宮司と。その黎明小徴を解し。日数遅く。尾張熱田へ入りしが家隸ホに口を鉗く。為朝のみをりせせ。別日その日を彼人の亡日なりともし。仏度追善法中り。のりて。為朝の菩提を吊ひ。鳴君を愛慕みく。養育ほどに。駿の春秋を預く。鳴君十六歳大推十八歳といふ年。の正月小誓姻ひたり。締めて。為朝の後と定め。大推丸を更く。源義實と名告りせり。義實壯年に及び。上西門院の判官代不補せられ。夫婦睦して。子ども二人を儲。嫡子義信。又上西門院の判官代不補せられ。二男義直と。左衛門尉に補せられ。その兄弟の子孫駿あり。今々に贅せと。或は張

府の南太渡村。為朝塚と号あり。その地園森に為朝の禿倉あり。今も八幡と稱せられ。及び。おすに判官義實。その父為朝の墳墓。太渡に築た。又その灵を園森に祀るや。家増の義實。父為朝。実子とて。鳴君のみ。その末不結は

壯士人を知り割符代ふ
八郎死を決し呉墳に詣

第九五回

為朝はその且大宮司李範ホに。これゆくといふ。二と里に及び。天と不和のく。明にわれ。人おのじとて。怪入り。中松山を過りて。多度と阿野郡の堺ホ出。ひしが。暗ゆ。人のおが。すれをば。あ夜連日の浦あて。駿の賊。只一人。少く刺。苗を旅。客あり。いふ。実子。秋世。あ。稀有。う。剛者。も。か。兒。小。わ。ひ。と。い。ふ。こ。の。う。さ。ま。と。い。は。し。て。その。ゆ。く。先。

又この風声せざるのほし。こゝちも付まらぬとおぼして。さほ只管に
 走り多し。久秋の日記も没きて。白峯の山墓小なり。是れを
 とりて。年齢九二と。おぼし。旅客とし。行くのひて。為朝を熟ゆ。え
 かつり。志ばと。呼ぶ。めり。言率。余のめれ。山辺の。為朝。身文の高。腕の骨の太。手力雄。命。尚。昨。夕。日
 の浦。影の賊。を打殺。多。人。あ。の。び。や。と。同。為。朝。父。の。怒。心。の
 遠。し。と。あ。の。り。なん。と。お。ほ。つ。い。の。お。と。と。それ。と。その。人。か。れ。と。答。え。と。と
 壯。俊。さ。れ。ば。と。そ。が。お。り。の。不。達。さ。り。れ。と。と。只。官。稱。噴。し。山。辺。り。青。雲。村。志
 む。ば。この。割。符。の。り。て。肥。後。國。益。城。郡。木。原。山。と。為。て。身。の。主。の
 勇士。を。愛。し。多。か。れ。か。つ。い。重。く。用。ひ。ら。う。し。彼。木。原。山。の。阿。蘇。山。は
 未。申。に。當。り。て。去。と。と。十二。と。里。なり。四。方。郊。野。に。て。獨。立。の。高。峯。と。れ。ん。と

尋。ほ。い。め。あ。の。あ。れ。と。信。中。に。説。示。か。て。懐。中。より。一。隻。の。割
 符。を。と。り。出。して。進。み。たり。為。朝。を。意。中。に。冷。笑。多。し。此。の。壯。俊。の。人。を
 知。る。の。冷。刺。不。愛。す。假。不。件。の。割。符。を。受。お。も。又。多。か。と。と。浮。命。に。て。又
 去。く。東。西。南。北。と。と。い。く。も。い。ま。明。主。の。遇。ひ。に。あ。れ。る。も。め。の。其。汗
 の。涙。を。頼。と。し。う。い。たり。と。回。答。多。し。壯。俊。大。小。飲。び。一。町。寧。に。再。會。せ
 契。り。つ。か。て。袂。を。と。り。たり。か。て。その。日。も。暮。り。と。す。れ。行。お。と。それ。を。群
 鴉。星。を。負。て。茂。林。に。帰。り。樵。夫。月。に。載。り。家。路。不。定。に。啣。じ。た。虫。の。音。に
 葉。末。の。露。ぞ。濃。中。の。り。れ。既。不。人。迹。た。れ。い。為。朝。の。り。た。れ。木。の。り。に。立。寄
 て。衣服。を。更。ち。山。墓。に。詣。て。それ。を。草。へ。一。叢。の。煙。を。残。り。て。玉。殿。燈。を。秋。螢
 と。五。更。の。夜。を。照。り。て。荊。棘。路。に。寒。し。百。石。城。や。百。官。の。紫。の。袖。は。い。は。れ
 朝。政。は。一。食。と。れ。十。善。の。君。と。して。過。世。の。悪。業。に。脱。ま。り。て。青。塚。に。骨。は。て

白揚風小戦に旅魂幽冥今何処かう呻吟あやうんげふ人界の富貴は爰
の中なれ快楽やう妻珍宝及王位も身死して伴依あなれはとく
界の火宅を出る永く九品の淨刹に至らん。あは容易にわらざり。あれを
又彼をかりあもつが果の果ハ数うて不足不涙を先がらわれ折もは
くく月光あ。柱を向上と二首のちを書きり。

山家集 瀬岐小泊。松山の津とマスと海や。新院かりしん。

御跡を尋りた。さもまうし久。

松山の浪おまがれく身一船のやぐて空しくまりにたれうま

白峯とまうれとら路の御墓よありそ

や君ひうの玉の床とてもからん後と何あうせん

仁安三年十月日。圓位とあり。さてハ西行法師も去る年の冬とく

たんと鳥ひつ。石の玉垣の斜がれ扉次押開れく蹲踞。さてマス中。君十
万乗の聖主として錦帳を北關の月に輝く身じも今と懐土望御魂魄
王體を南海の俗小混と。あは拂く御迹あなれ。秋草泣く涙と法さ
嵐に向く君の墓を回ハ老耄悲く心を傷む。佛儀ハ見えはして只朝雲
夕月をえは法音ハ見えはして只松響鳥語と笑く。軒傾れくハ曉風寒
く。夢破とてハ夜雨防がじ。昔今の御有様いと痛くもははしくとひ
なれど。微臣が孤志を述べお由ま。既に勢竭れ力究く。今生の誠忠を
訴後世の苦樂を共し。君に強顔うりけるものもあ。とぐくさり殺
さるやとあのみ。そがはも大鳴あなれ。尊冥を驚く。あはるの心
とすく。涙を潜然と落しつ。やぐて氷を短刀が抜く。腹小突くとん
そは。怪さう。足忽地ハ難麻ていふもす。時小兒が嶽の



廣岐院の
陵
高橋君父
の墓



本言百八行

高橋君父の墓

九

小叢雲より引く。月の半面を顯しきつる影いと暗く電同き閃く。墓の中に散徹し山下風のいと凄じれふ吹られ木の玉ふり落とも武者
 四五十騎前馳して出立り。次小腰巻か昇そののいこぞく象の鼻さきの唸
 て左右の腋に翅生し。こゝ怪しと見えはほどお。中て御巻を墳のほりより扛
 居し。武士の二帯小列を整て跨躍し。警蹕の声もに御巻の中より
 玉音高く。

朝倉を只いざげらに之も中も釣られ海士の音もはるれ
 と一首のふはに蹄音をりありたる。没の裾おきまふ成又まれば。新院此
 世お在し。れ日の面影お露違のせまらに。こしよりお寢まよりこれ小ころは
 けられ。随従もたれ徒をえられ小玉の雄多。お大臣頼長公以下下野判官
 正弘その子右衛門大夫頼弘ホよ至るは。北六人唯も。お六條判官及義

その子左衛門尉頼賢。掃部少頼仲加茂六郎為宗源七郎為成源九郎
 為仲父子六人。次小平馬助忠正その子院藏人長盛次男皇后宮侍長忠綱
 三男。大臣勾當正綱。四男。平九郎通正。次。小村上判官代基。國をり。あはして
 一人。當千の兵士九四人。おのく。白地の錦れ。鎧直垂に。質木の弓。矢。杖。と。白羽
 の征矢と。負。た。怒。き。面。に。あ。つ。つ。れ。て。いと。お。ど。ろ。ろ。し。く。吻。息。燭。と。か。く
 て。草の葉末を照せり。為朝も。途。こ。ろ。こ。に。躍。り。て。父。為。義。を。け。り。ぐ。と
 へ。れ。お。わ。り。し。世の面影は異な。り。ね。ど。鬚の霜。さ。入。降。と。え。て。播。乱。と。る。後
 髪。へ。銀の針のこ。こ。額の皺。へ。の。浦。お。う。ち。お。と。れ。浪。より。繁。れ。れ。と。る。お
 猛。と。武者態。お。て。長。柄の直垂に。白。糸。威の鎧。名。も。恩。賜の御。劔。鶴。丸
 を。帯。く。り。も。卑。も。賢。も。愚。か。も。親。子。の。恩。愛。疎。く。と。ら。れ。お。の。れ。た
 を。為。朝。ら。小。お。と。し。へ。ま。り。お。ん。づ。ら。に。王。は。近。た。れ。ば。畏。と。て。名。昔。も。達

その父もそれを承りてあつていん。ころそがえうるなるりけり。そのとれたる
頼長より多。左右さき。成徳なりと云ふにして。さても御敵おんてき。玉枝朝たまえしあを君きみ。山やま。在世せいせいの日に誅ちゆうじ
多おほひつ。まは憎にくしとおほそ伊勢平氏いせのへいぢをいひして。滅おほくた。おのく謀そらの
ぞ。公きみ。まおけ。せえ。あけ。ゆへ。と宣のたまふれば。為義忠正ためよしただただの如ごとくもにや。す。清盛せいせい
驚おどおの。小人おとこ。なれども。過世あやせ。よくて。官禄人臣くわんろくじんの上うへを究きつめ。一族いちぞく。とる。朝恩あそん。と。清
ま。暴虐ぼうごつ。を道みち。うり。天あま。その驕おごり。を憎にくこと。え。と。あ。め。れ。重盛ちゆうせい。徳行とくぎやう。乃
父ちち。芳よし。き。忠ちゆう。し。て。孝かう。と。あ。り。て。外あひだ。その。勢せき。を。禦おほ。ぐ。平家へいけ。の。ま。は。滅おほ。せ。と。れ
と。重盛ちゆうせい。あ。れ。ば。な。り。遮さへ。莫な。彼か。が。命いのち。数かず。今いま。より。後のち。十じゅう。年ねん。の。外あひだ。と。出で。て。且かつ。く。し。
ま。あ。の。つ。う。ら。便べん。宜ぎ。を。お。れ。の。日ひ。あ。る。と。し。と。す。新院しんいん。と。れ。を。聞き。食く。て。朕みづか。憎にくし
と。あ。り。あ。の。の。豈いか。清盛せいせい。の。こ。な。らん。や。重盛ちゆうせい。と。に。世よ。不ふ。な。く。い。雅仁みやにん。後のち。白河しろがわ。院いん。時とき
物もの。を。と。り。せ。羊ひつぎ。耳みみ。の。鬻う。憤ふん。火ひ。散ち。り。て。入い。清盛せいせい。元もと。耳みみ。君きみ。臣おみ。の。礼れい。を。忘わす。れ。さ。れ。ば。恨うら

小雅せうが。仁に。成なり。恨うら。し。て。鳥羽とりは。の。離宮りきゆう。へ。押籠おしこ。に。大政大臣おほまじだいにん。以下いげ。四五十しゅうじゅうご。人ひと。の。官職くわんしやく
成なり。止とど。め。岡おか。白しろ。の。太宰たいさい。推帥すいすい。小せう。辻つじ。に。あ。り。忽たち。地ぢ。人ひと。望のぞ。み。不ふ。終しま。る。稀代きだい。の。珍事ちんじ。玉たま
耳みみ。ん。その。時とき。為な。義よし。と。先陣せんじん。を。し。し。忠正ちゆうただ。へ。後陣ごじん。を。し。し。法住寺殿ほふじゆうじやうじやう。後のち。白
所ところ。の。西にし。れ。門かど。より。入い。り。と。な。れ。彼か。君きみ。臣おみ。の。濱はま。岐ぎ。の。浦うら。小せう。押おし。引ひ。は。し。る。海うみ。不
沈しづ。む。と。な。れ。と。仰おほ。され。ば。為な。我われ。を。こ。めて。す。中なかつ。の。法ほふ。住じゆう。寺じやう。殿だん。の。門かど。の。不ふ。動
明王めいおう。大だい。威い。徳とく。の。固こ。ま。ふ。な。る。ふ。その。と。れ。と。も。入い。り。が。こ。ろ。ん。そ。の。い。ふ。せ。を。せ
あ。ふ。ふ。と。す。は。ら。は。清盛せいせい。が。西にし。八はち。條じょう。の。亭てい。へ。渡御わたりご。あ。ら。る。を。お。こ。し。て。仰
と。れ。ば。衆しゆう。皆みな。の。誠まこと。あ。ら。る。べ。し。今いま。只ただ。十じゅう。年ねん。を。扱あつか。ひ。て。お。ひ。ま。じ。ま。ら。ん
の。を。と。回くわい。答た。ふ。と。な。れ。新院しんいん。を。も。咲さ。ひ。ひ。ぞ。既すで。不ふ。怨うら。敵てき。誅ちゆう。罰ばつ。の。こ。り。の。定さだ。め。つ。し。し
ご。忠臣ちゆうじん。の。子孫しそん。小せう。勸賞くわんせう。せ。を。朕みづか。が。み。小せう。命めい。を。預あづか。り。せ。り。の。一ひと。人ひと。と。して。を。困こま。ふ。お。り。を
あ。ら。ね。と。就中しゆうちゆう。為な。義よし。と。嫡子ちやくし。義朝よしあさ。を。引ひ。こ。り。お。れ。駿うま。の子こ。も。と。お。し。と。あ。り。し。ゆ

何の日ありと忘れつた痛たるは幼少の頃のことも。その保元小首次加らるる
今ハ只ハ即ち朝の生れなり。されば彼ハ六十餘別の摠追神使ませまく
何一もなれど。いふせん。我朝が子。頼朝が父後の武運洪大にして天既ふとれふ
許せしが。朕が神カ不及び。さ。に為朝が二男朝雅丸ハ足利と我康密ふ
養ひしる。今見よ下野にあり。それが子孫せりて天下ハ武將と仰じ又為朝
が未生の末子成りて某の國に君とせし。それ朕が顯負の制度ゆゑ。ど
為朝夫妻家諫ホウ忠義の善報その餘慶子孫に及ぶの世して自然の
理なり。さ。頼朝一旦武運せりて。平家を追討。賞罰その。不
及も。それが親の義朝が父。我朝の悪報その餘殃子孫に係り。頼朝見事
不和にして。有功の身ハ殺し。父子二代僅か四十年にして。自滅せん。その其
修ると。死。然。然。い。い。と。改元の年に死。を。の。験。と。と。に。夫。若。小

か。の。に。善。報。あり。悪。報。あり。の。思。報。の。輪。廻。應。報。の。換。ゆ。え。な。れ。ふ。あ。の。に。
鬼神豈人に私せんや。あ。の。を。為。朝。世。に。恨。み。を。こ。う。た。ら。し。自。殺。して。失。ん
と。い。つ。て。の。究。く。あ。の。を。い。ひ。今。茲。冬。の。半。に。至。り。肥。後。國。小。倉。に。そ。う。ら
に。して。故。あ。の。年。身。の。艱。苦。を。か。り。耐。え。日。を。あ。の。つ。れ。あ。う。と。い。く。も。命
運。を。全。う。し。て。あ。の。に。合。して。あ。の。に。離。れ。その。徒。り。に。非。命。に。死。を。れ。その
多。か。う。ん。の。忠。義。の。あ。の。に。年。身。を。為。朝。が。夥。の。敵。以。射。殺。し。た。れ。その。報。に
と。あ。の。に。あ。の。に。恨。む。に。足。ら。し。世。の。常。言。に。苦。中。の。苦。ハ。喫。し。ひ。く。も。人
の。上。の。人。と。な。れ。に。し。と。い。う。る。も。追。り。て。死。成。軽。ん。ど。れ。ハ。日。本。に。は。し。ひ。な。れ。と
多。う。の。慮。の。あ。の。に。似。て。学。ぶ。の。誤。なり。は。の。わ。ね。を。宣。を。為。我。の。世。に
も。辱。を。多。う。あ。の。愚。臣。が。子。も。夥。な。れ。中。に。為。朝。と。その。智。勇。兄。も。身
あ。も。勝。と。い。は。れ。く。惜。く。あ。の。に。彼。が。子。孫。が。莫。大。の。果。報。の。い。は



崇徳院

左府頼長

源九郎為仲

六郎為宗

五郎為朝臣

其三



兵工尉頼弘

左門大夫正弘

六條判官為義

平馬助忠正

四郎左門頼實

七郎為政

欽びこれ小海とるの事。是併君の恩恵ふことと謝一々世に陪後の堂
 と。又欽び又速正弘頼弘御配ふ候て御盃を勸めよれば新院と云ふ
 喫し食く。中て群臣は賜長以下次第にこれを巡りして。おのく喫する
 と云はし。新院をせしめたり。頼長公為我朝臣以下の群臣身の中より
 猛火の生し阿と叫ぶ。そのれ合して一團の燐火となり。金光を發つ。見
 が嶽を投して飛去り。これや此天狗道の苦難かと。そを南柯の一夢と
 て。為朝ハ驚小短刀を抜く。これ儘石の玉垣あり。これおもあらしで
 せ。中て歎息し。折しも雲間天啼く。初雁が音はうら仰る。月
 かりり。雲うられ。酒蕭々と降出る。はては夢ありあり。君と父
 と。夢中に君をゆりして。後事示し。自害成る。あまよと。かれは桃と
 ちく死す。死ふれば。且新院腰裏の内より。父えさ。したまひ。御製ふ

一朝倉や只いづにゆきおも。釣られ海士の音こそほろれと。牧ら御
 倉の木の丸殿あまひは。こほりる為朝を。いづふ。本意の。御
 と御器の。あられを。二十一字。あまひ。あられ。面目。され。感謝の涙
 拭ひ。通霄。御墓に候。て。天も。明。んとす。は。

朝倉や木の丸殿より。くひの。君。あられ。く。ぬれ。られ。し。

かく。續。て。子。向。なり。中。て。松。山。小。退。れ。る。あ。じ。彼。山。中。に。身。を。潜。し。遂。に。

示。現。ま。ま。し。その。年。冬。の。半。に。至。り。山。を。出。肥。後。國。へ。を。赴。れ。られ。按。が。れ。ふ。

朝倉や木の丸殿云々。これ。あ。の。伶。人。浮。遊。者。是。成。入。道。蓮。如。

かく。あ。の。似。く。下。の。句。少。く。違。へ。る。あ。れ。の。み。に。不。圖。蓮。如。が。あ。ら。ま。ひ。は。し。く。か。

口跡をふりし。さればこの夜為朝の又多ひらに違ひ。その後洛わへる。怪異のしるし。是は源政院の祟なり。とて治承元年六月二十九日追跡あり。宗徳院とぞしけれ。箇様は宥進せしめられ。御憤あり。されや同年八月朔日。小松大臣重盛逝法。清盛いよく暴悪成放。遂に物狂。種種の怪癡あり。これも又宗徳院の御灵。平家滅て後。いよく宥進せん。みふじし御合戦あり。大炊御門が末の御所の迹。社を造りて祝あり。左衛門長公。贈官贈位ありて。太政大臣正一位を贈られ。元暦元年四月十五日のゆし。されば平家墳岐の浦。に没落して滅亡するも。手彼御宗と。と。なるくより。今按。平治元年正月二日。左馬頭。朝臣長田が為。小殺され。正治元年正月十二日。右大将頼朝。卿薨。去。九年十二月。落馬。よろ。病。と。東。頼朝。薨。去。を載。その死の善。ら。必。由。あ。ゆ。ん。放。美。久。元。年。正。月

右大臣實朝公禪師公曉。小殺され。父子三代。と。正。月。ふ。干。く。薨。と。あ。う。と。後。焉。あ。の。く。改。え。の。年。に。の。り。又。足。奇。と。ひ。つ。ば。且。義。朝。の。野。間。内。海。も。長。田。家の浴室に害せられ。その後四十四年を歴。元久元年七月十八日。義朝の孫。從。二。位。左。中。將。頼。家。朝。臣。伊。豆。國。修。善。寺。の。浴。室。に。害。せ。れ。れ。も。又。改。え。の。年。あり。東。瀧。不。岐。害。の。り。み。し。將。軍。譜。曰。或。は。い。ふ。頼。家。浴。室。の。祖。孫。二。世。又。その。殃。及。せ。り。夫。じ。め。備。を。け。る。の。と。ら。聖。人。と。れ。が。後。を。示。り。况。く。義。朝。その父を殺。その惡報。か。の。こと。く。な。ら。ざ。れ。と。を。お。ん。や。と。れ。を。又。彼。と。あ。も。も。世。の。童。子。亦。忠。孝。の。り。も。思。ふ。と。べ。只。お。さ。れ。て。も。お。さ。れ。を。自。他。せ。れ。孽。也。

椿説弓張月後篇卷之四 畢

